

はじめに

春の岬旅のをはりの どり
浮きつつ遠くなりにはけるかも (『測量船(三好達治詩集)』所収「春の岬」)

永年詩をやっていた江連博(俳論などのセカンドネーム:藤島敏)次兄が、この平成十三年九月十五日に急逝した。病気一つせず、健康そのもののように見えた兄が、自治医大に初診察、即入院、そして、もうすぐ退院という暁に、病気が急変してその六十七歳の生涯を閉じた。

身内のものはそれぞれがそれぞれに呆然自失の状態であったが、百か日が過ぎた今、やっとその死という厳粛な事実をありのままに受容することができるようになり、私も、かって、その兄と「二人句会」などをやっていた頃のノートを見られるまでの平静さを取り戻すことができるようになった。しかし、今でもその兄の書斎に入り、その兄の遺品となった書籍の整理や、兄が永年書き留めていたものを整理して、何か遺稿集のようなものをまとめようとする気持ちにはとてもなれずに、実は、未だにその兄の書斎をのぞくことすらできない始末なのである。

そもそも兄が永年やっていた詩は、身内のものにとっては丁度ピカソの「ゲルニカ」を見せつけられるような、難解難渋の極まれるものとして理解されていて、さぞかし兄にとっては「どうして分かってくれないのか」というもどかしさと、ある種のやるせなさを覚えていたのではなかろうか。

その兄にとって、唯一身内のものに共感をもって受け入れられたものは、俳句・俳論・連句などを中心にした『南郷庵通信』(母が亡くなった隠居の家「南郷庵(なんごうあん)」による兄の命名)の編集・刊行であった。親戚・知人が気軽に投稿したものをメインにして、やや控え目に自分の作品を載せるという試みである。

この『南郷庵通信』で兄が、藤島敏のセカンドネームで発表していたものに、後に、兄が所属していた『ATORI(詩とエッセー)』(発行人:高橋昭行)に、「高柳重信の世界」などで掲載されることとなった。これらの作品を読み返しながら、これだけの重い世界が、兄にとっては、控え目な余技のような世界であったとしたら、そのメインの、それこそ生涯を賭したような、いわば兄の本技とした「詩の世界」とは、どれほどの重量感とカオスとに満ち溢れたものなのかと、身震いするような衝撃すら覚えるのである。

多くの詩に携わった方がそうであったように、兄も連句や俳句をこつこつとものにしていった。そして、その連句や俳句の相手は主として私があたり、何時しか、その相手をした私も、その兄以上にどっぷりと、この不可思議な俳諧の世界(俳句・連句・俳論・川柳)にのめりこんでいったのである。

この兄は、詩や俳句などをやられる方の多くが持っているある種の茶目っ気さを持って

いて、私のペンネームまで用意していて、私に無断で私と兄との「二人句会」での私の作品などを新聞などに投稿していた。そして、その活字になったものなどを提示して「もう少し本腰を入れて創作しろ」などと、もう後戻りできないように仕向けるのであった。

その兄が最後に私に遺し言葉の一つに、「もう一度、三好達治や梶井基次郎のものを目にしたい」ということ…、これは、退院したら、ここから始めたいというような会話の一つとして漏らされたものなのである。今、これらのことを反芻しながら、もし兄が生きながらえて、かつて貪り読んだように、もう一度、三好達治や梶井基次郎の世界との再邂逅を遂げていたら、どういう新しい世界が展開されていたのかと…、そんな叶わない夢をも追いつけているのである。

ともあれ、私が今ライフワークとしている、この十七字の短詩形の世界の導き手の一人でもあった兄に捧げるものとして、兄が自分の詩作品を詩誌へ発表するということを一時断った空白の時期(それは昭和四十年代から五十年代にかけて「二人句会」と称しての私と兄との俳諧という不可思議な体験を共有しあった時期)から、兄が亡くなった平成十三年までの、かれこれ三十年間にわたる私の作品群(これらの多くは事前、事後に亡き兄は目にしている)を一つにまとめて、それを一周忌の前に霊前に捧げることは、亡き兄の遺稿集の編集が叶わないもののせめてもの代償として、その兄が快く受け入れてくれるものの一つと思えるのである。

この句集の題名は、亡き兄の棺に入れた良寛の漢詩の一節(「我生何処来(ワガショウイズコヨリキタル)/去而何処之(サリテイズコカニユク)」)と生前にその兄に頂いた一枚の「流れゆく小舟」とも題すべき油絵(表紙カバーのもの)とを重ね合わせながら、「流れゆくものの賦」(亡き兄のイメージの「もののふ(いくさびと)」とその生涯を賭した「詩(賦)」を投影させて)とすることとした。

さらに、本来これらの句集を編むに際しては、俳句・連句・俳論の創作にあたって、終始ご指導を賜っている、俳誌『橘』の松本旭主宰・松本翠副主宰、同『鬼怒』の増山美島前編集長、同『紺』の桑原まさ子主宰、「栃木朝日俳壇」の石田よし宏選者、また、「蕪村研究会」の丸山一彦・中田亮・成島行雄各先達、あるいは、亡き兄への追悼の意を体して、亡き兄が最後にその創作の発表の場としていた「詩とエッセー」誌の『ATORI』の高橋昭行発行人などのお力添えを得て、しかる後に実現すべきなのかも知れないが、ここは、亡き兄が最後まで自力で編集・刊行していた『南郷庵通信』の特別号として、これからのその継続への意思表示とその決意を秘めての、新たなる『南郷庵通信』の再スタートをきることの一里塚とするために、この句集刊行に踏み切ることが、亡き兄が最も喜んでくれるのではなからうかと…、そのような思いからこの句集編集のスタートを切ったのである。

このことは同時に、亡き兄が私との「二人句会」などでたびたび口にしていた「俳諧(俳句・連句・川柳)のアンソロジー(詞歌集)編集の革新」ということへの新しい試行的な実践を企てるという冒険の許容も包含するということを意味していた。その試行的な実践の冒険の内容とは概略次のようなものである。

- 1 これまでの伝統的な縦書きで編集するという方法をとらず横書きで実施することとする。
- 2 視覚的編集(新仮名遣いと旧仮名遣い、新字体と旧字体、あるいは、ルビの在り方など)に意を用いることはもとより聴覚的編集(読みの重視)にも目を向けて、新工夫(「ローマ字」による読みの付与、「切れ・間」などの表示の付与)を施すこととする。
- 3 この種の編集の「季題(季語)別」あるいは「編年体別」の良さを踏襲しながら、「月別季題の選択」や「モチーフに合わせた編集」など「画一的編集の脱却」などの試行も実施することとする。

これらのことは、現在、俳諧(俳句・連句・川柳)に携わって、その句集の編集などに経験のある方からは、一見無謀の謗りを頂戴するところのものであろうが、今や、ペーパーレスの電子図書やネット句会(情報機器を媒体としての句会)などが日常茶飯事となったことに鑑みて、遅かれ早かれその検討の時期が来るものと、そのための先駆的な試みとしてご理解を賜りたいのである。ながながと凡そこの種のアンソロジーの「はじめに」には相応しくないようなことを綴ってきたが、最後に、亡き兄が好んで口癖にしていた三好達治の言葉を結びとして、また、そのことを嘯みしめながら、この一文を閉じることとしたい。

拙を用いて憚るな

鳴け 田螺！

(『測量船(三好達治詩集)』所収「小序」より)

平成十四年一月(亡き兄の百か日に詣でた日)

江連 晴生

(追記)

① このアンソロジーの編集に当たっては、俳誌『橘』(松本旭主宰)と同『鬼怒』(増山美島主宰)に掲載されたものを主として、同『杉』(森澄雄主宰)、同『霜林』(桂樟蹊子主宰)、同『紺』(桑原月穂主宰)、「しもつけ文芸(下野新聞)」(選者:平畑静塔・手塚七木)、「栃木文芸(栃木新聞)」(選者:桑原月穂・松原南斗星・小林呂穂)、「栃木朝日俳壇(朝日新聞)」(選者:増渕一穂・石田よし宏)などで選句された約二千句から、下記のとおりの一千句を選句することとした。(註:上記の主宰者・選者については選句された当時のままの記載である。)

- 冬・初春の部(十二月・一月・二月) … 季題(八十項目)、句数(三百句)
- 春・初夏の部(三月・四月・五月) … 季題(六十項目)、句数(二百句)
- 夏・初秋の部(六月・七月・八月) … 季題(百項目)、句数(三百句)
- 秋・初冬の部(九月・十月・十一月) … 季題(六十項目)、句数(二百句)

② たまたま、このアンソロジーの編集中、俳誌『紺』(桑原まさ子主宰)の、この平成十四年一月・二月・三月号において、編集担当の酒井晃氏のお手を煩わして晴生の「一つの昭和俳句史(月穂の軌跡)」が掲載された。そこで取り上げた昭和二年から平成二年までの六十年余の間の傑出した俳人・柳人の先達達には、有形・無形の影響を受けており、このアンソロジーの背景をなすものとして、その全文を併載することとした。

編集に当たって(凡例)

○ 「横書き」で実施することについて

IT時代ともいわれる今日、パソコン(ワープロ)は万人の共通物となった。このパソコンの使用にあたって、その大部分は横書きで、しかもローマ字で入力をして、しかる後に最終的に体裁上縦書きというステップを踏む。とするならば、この句集の編集においては、かかる迂回路を取らず、発想を変えて、直接横書きのままという「句集編集の横書き」という新しい試みでデザインすることとする。このため、縦書き特有の「繰り返し」記号などを用いている句形については、適宜平仮名などでの句形に改めることとする。

○ 「視覚的編集」(新仮名遣いと旧仮名遣い、新字体と旧字体及びルビの在り方など)並びに「聴覚的編集」(読みの重視)について

およそ俳句の世界ほど「旧仮名遣い」と「新仮名遣い」との峻別に神経質な世界を他に知らない。しかし、この句集の編集に当たっては、この両者を併用して、当該句が創作された環境のありのままの、即ち、加工せずにそのままの形でデザインしたい。このことは、漢字の表記についても均しくあてはまることであって、「旧字体」と「新字体」とを峻別せずに、創作されたままにデザインすることとする。また、「ルビは一切ふらない」という原則とともに、読みの重視という観点から、全句に「詠みのローマ字を付記することとする」。この「読みのローマ字を付記する」ことの「ローマ字」の「促音(っ)」などについては、「パソコン(ワープロ)」で使用されているものを用いることとする。さらに、「読みの重視」に関連して、創作者の「読み」とそれに関連しての、「読みの間(*)・切る(/)・切字(/)」などの表記を加えることとする。

○ 「季題(季語)別」及び「編年体別」の編集並びに「月別季題の選択」と「モチーフに合わせた編集」などの画一的編集の脱却について

「季題(季語)別」及び「編年体別」の編集という観点から、全句についてその両者との関連を記載することとする。併せ、伝統的な「春・夏・秋・冬・(新年)」の分類の他に、連句で使用するところの「各季の初・仲・晩」も併記することとする。「月別季題の選択」については、本書の「はじめに(追記)」の「冬・初春の部(十二月・一月・二月)」・「春・初夏の部(三月・四月・五月)」・「夏・初秋の部(六月・七月・八月)」・「秋・初冬の部(九月・十月・十一月)」などの現実の季節感による新しい分類での編集を試行することとする。また、「モチーフに合わせた編集」などについては、「冬・初春の部」の冒頭には「雪」の百句に「自註自解」を施し、本書全体の「序章」的な意味合いを持たせ、また「春・初夏の部」では「花・桜」(五十句)、「夏・初秋の部」では「夏・炎天・八月十五日」(五十句)そして「秋・初冬の部」では「秋・秋桜」(五十句)をまとめて編集して、句集全体としての変化などについて意を用いることとする。そして、何よりも、それぞれの部の句の冒頭に、本句集の編集の直接的な要因となった亡き兄(詩人・江連博、俳人・藤島敏)の追悼の書として、亡き兄の遺稿の一つの「(続)高柳重信の世界」(『ATORI』45所収)の珠玉のような一節を用いることとし、画一的編集の脱却を試行することとする。